



岩波文庫

5555

風立ちぬ・美しい村

堀辰雄作

岩波書店

昭和三十一年一月九日 第一刷発行
昭和三十七年八月三十日 第十一刷発行

風立ちぬ・美しい村

定価 ★

作 者

堀^{ほり}

辰^{たつ}

雄^お

発 行 者

東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地
岩 波 雄 二 郎

印 刷 者

東京都新宿区改代町二十四番地
田 中 昭 三

発 行 所

東京都千代田区
神田一ツ橋二ノ三

鐵 岩 波 書 店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

理想社印刷・桂川製本

岩 波 文 庫

5555

風立ちぬ・美しい村

堀 辰 雄 作



目次

美しい村

序 曲……………七

美しい村……………三

夏……………四

暗い道……………三

風立ちぬ

序 曲……………七

春……………七

風立ちぬ……………九

冬……………二四

死のかげの谷……………一五

解 説（河上徹太郎）……………一六

美
し
い
村

天の瀟氣の薄明に優しく會釋をしようとして、

命の脈が又新しく活潑に打つてゐる。

こら。下界。お前はゆうべも職を曠うしなかつた。

そしてけさ疲が直つて、己の足の下で息をしてゐる。

もう快樂を以て己を取り卷きはじめる。

斷えず最高の存在へと志して、

力強い決心を働かせてゐるなあ。

序 曲

六月十日 K：村にて

御無沙汰をいたしました。今月の初めから僕は當地に滞在して居ります。前からよく僕は、こんな初夏に、一度、この高原の村に来て見たいものだと言つてゐましたが、やつと今度、その宿望がかなつた訣です。まだ誰も來てゐないので、淋しいことはそりあ淋しいけれど、毎日、氣持のよい朝夕を送つてゐます。

しかし淋しいとは言つても、三年前でしたか、僕が病氣をして十月ごろまでずっと一人で滞在してゐたことがありますね、あの時のやうな山の中の秋ぐちの淋しさとはまるで違ふやうに思へます。あのときは籐のステッキにすぎるやうにして、宿屋の裏の山徑などへ散歩に行くと、一日毎に、そこいらを埋めてゐる落葉の量が増える一方で、それらの落葉の間からはときどき無氣味な色をした茸がちらりと覗いてゐたり、或はその上を赤腹（あのなんだか人を莫迦にしたやうな小鳥です）なんぞがいかに横着さうに飛びまはつてゐるきりで、ほとんど人氣は無いのですが、それでゐて何んだかそこら中に、人々の立去つた跡にいつまでも漂つてゐる一種のほひのやうなもの、——ことにその年の夏が一きは花やかで美しかつただけ、それだけその季節の過ぎてからの何とも言へぬ佗びしさのやうなものが、いはば凋落の感じのやうなものが、僕自身が病後だつたせゐか、一層ひしひしと感ぜられてならなかつたのですが、（——もつとも西洋人は

だかなり残つてゐたやうです。ごく稀にそんな山徑で行き逢ひますと、なんだか病み上がりの方を胡散くささうに見て通り過ぎましたが、それは僕に人なつかしい思ひをさせるよりも、かへつてへんな佗びしさをつのらせました……)——そんな佗びしさがこの六月の高原にはまるで無いことが何よりも僕は好きです。どんな人氣のない山徑を歩いてゐても、一草一木ことごとく生き生きとして、もうすつかり夏の用意ができ、その季節の來るのを待つてゐるばかりだと言つた感じがみなぎつてゐます。山鶯だの、閑古鳥だのの元氣よく囀ることといつたら！ すこし僕は考へごとがあるんだから黙つてゐてくれないかなあ、と癪癪を起したくなる位です。

西洋人はもうぽつぽつと來てゐるやうですが、まだ別莊などは大概閉されてゐます。その閉されてゐるのをいいことにして、それにすこし山の上の方だと誰ひとりそこいらを通りすぎるものもないので、僕は氣に入つた恰好の別莊があるのを見つけると、構はずその庭園の中へはひつて行つて、そのヴェランダに腰を下ろし、煙草などをふかしながら、ぼんやり二三時間考へごとをしたりします。たとへば、木の皮葺きのバンガロオ、雜草の生ひ茂つた庭、藤棚（その花がいまだ度見事に咲いてゐます）のあるヴェランダ、そこから一帯に見下ろせる樅や落葉松の林、その林の向ふに見えるアルプスの山々、さういつたものを背景にして、一篇の小説を構想したりなんかしてゐるんです。なかなか好い氣持です。ただ、すこしぼんやりしてゐると、まだ生れたての小さな蛸（トビ）が僕の足を襲つたり、毛蟲が僕の帽子に落ちて來たりするので閉口です。しかし、さういふものも僕には自然の僕に對する敵意のやうなものとしては考へられませんか。むしろ自然が僕に對してうるさいほどの好意を持つてゐるやうな氣さへします。僕の足もとになど、よく小さ

な葉っぱが海苔卷のやうに卷かれたまま落ちてゐますが、そのなかには芋蟲の幼蟲が包まれてゐるんだと思ふと、ちよつとぞつとします。けれども、こんな海苔卷のやうなものが夏になると、あの透明な翅をした蛾になるのかと想像すると、なんだか可愛らしい氣もしないことはありません。

どこへ行つても野薔薇がまだ小さな硬い白い蕾をつけてゐます。その咲くのが待ち遠しくなりません。これがこれから咲き亂れて、いいにほひをさせて、それからそれが散るころ、やつと避暑客たちが入り込んでくることでせう。かういふ夏場だけ人の集まつてくる高原の、その季節に先立つて花をさかせ、そしてその美しい花を誰にも見られずに散つて行つてしまふさまたな花（たとへばこれから咲かうとする野薔薇もさうだし、どこへ行つても今を盛りに咲いてゐる躑躅もさうですが）——さういふ人馴れない、いかにも野生の花らしい花を、これから僕ひとりきりで思ふ存分に愛玩しようといふ氣持は（何故なら村の人々はいま夏場の用意に忙しくて、そんな花なぞを見てはゐられませんから）何ともいへずに爽やかで幸福です。どうぞ、都會にゐたまれないでこんな田舎暮らしをするやうなことになつてゐる僕を不幸だとばかりお考へなさらないで下さい。

あなた方は何時頃こちらへいらつしやいますか？ 僕はほとんど毎日のやうにあなたの別荘の前を通ります。通りすがりにちよつとお庭へはひつてあちらこちらを歩きまはることもあります。昔はあんなに草深かつたのに、すつかり見ちがへる位、綺麗な芝生になつてしまひましたね。それに白い柵などをおつくりになつたりして。……何んだかあなたの別荘のお庭へはひつても、

るで他の別荘の庭へはひつてゐるやうな氣がします。人に見つけられはしないかと、心臓がときどきして來てなりません。どうしてこんな風にお變へになつてしまつたのか、本當におうらめしく思ひます。ただ、あなたと其處でよくお話したことのあるヴェランダだけは、そつくり昔のままですけれど……

ああ、また、僕はなんだか悲しさうな様子をしてしまつた。しかし、僕は本當はそんなに悲しくはないんですよ。だつて僕は、あなた方さへ知らないやうな生の愉悅を、こんな山の中で人知れず味つてゐるんですもの。でも一體、何時ごろあなた方はこちらへいらつしやるのかしら？ あなた方とはじめて知り合ひになつたこの土地で、あなた方ともう見知らない人同志のやうに顔を合せたりするのは、大へんつらいから、僕はあなた方のいらつしやる前に、この村を出發しようかと思ひます。どうぞその日の來るまで僕にも此處にゐることを、そしてときどき誰も見えないとき、あなたの別荘のお庭をぶらつくことをお許し下さい。

またしても、何と悲しさうな様子をするんだ！ もう、止します。しかし、もうすこし書かせて下さい。でも、何を書いたものかしら？ 僕のいま起居してゐるのはこの宿屋の奥の離れです。御存知でせう？ あそこを一人で占領してゐます。縁側から見上げると、丁度、母屋の藤棚が眞向ふに見えます。さつきもいつたやうに、その花がいま咲き切つてゐるんです。が、もう盛りもすぎたと見え、今日あたりは、風もないのにぼたぼたと散りこぼれてゐます。その花に群がる蜜蜂といったら大したものです。ぶんぶんぶんぶん唸つてゐます。——この手紙を書きながら、ちよつと筆を休めて、何を書かうかなと思つて、その藤の花を見上げながらぼんやりしてゐると、

なんだか自分の頭の中の混亂と、その蜜蜂のうなりとが、ごつちやになつて、そのぶんぶんいつてゐるのが自分の頭の中ではないかしら、とそんな氣がしてくる位です。僕の机の上には、マダム・ド・ラファイエットの「クレエヴ公爵夫人」が讀みかけのまんま頁をひらいてゐます。はじめてこのフランスの古い小説をしみじみ讀んでゐますが、そのお蔭でだいぶ僕も今日このごろの自分の妙に切迫した氣持から救はれてゐるやうな氣がしてゐます。この小説についてはあなたに一番その讀後感をお書きしたいし、また黙つてもゐたい。二三年前、あなたに無理矢理にお讀ませした、ラジイゲの「舞踏會」は、この小説をお手本にしたと言はれてゐる位ですから、まあ、あれに大へん似てゐます。しかし「舞踏會」のときは、まだあんなにこだはらずに、その本をお貸しが出來たけれど、そしてそれをお讀みになつてもあなたは何もおつしやらなかつたし、僕もそれについては何もお訊きしなかつたが、それでも或る氣持はお互ひに通じ合つてゐたやうでしたけれど、いま僕は、あの時のやうにこだはらずに、この小説の讀後感をあなたにお書きできるかしら？

第一、この手紙にしたつて、筆をとりながら、果してあなたに出せるものやら、出せさうもないものやら、心の中では躊躇つてゐるんです。恐らく出さずにしまふかも知れません。……こんなことを考へ出したら、もうこの手紙を書き續ける氣がなくなりました。もう筆を置きます。出さ出さないか分かりませんが、ともかくも左様なら。

美しい村

或は 小遁走曲

或る小高い丘の頂きにあるお天狗様のところまで登つて見ようと思つて、私は、去年の落葉ですつかり地肌の見えないほど埋まつてゐるやや急な山徑をガサガサと音させながら上つて行つたが、だんだんその落葉の量が増して行つて、私の靴がその中に氣味悪いくらゐ深く入るやうになり、腐つた葉の濕り氣がその靴のなかまで滲み込んで來さうに思へたので、私はよつぽどそのまま引つ返さうかと思つた時分になつて、雜木林の中からその見棄てられた家が不意に私の目の前に立ち現れたのであつた。さうしてその窓がすつかり釘づけになつて居て、その庭なんぞもすつかり荒れ果て、いまにも壊れさうな木戸が半ば開かれたままになつてゐるのを認めると、私は子供らしい好奇心で一ぱいになりながらその庭の中へづかづかと這入つて行つた。

さうして一めに生ひ茂つた雜草を踏み分けて行くうちに、この家のかうした光景は、數年前、最後にこれを見た時とそれが少しも變つて居ないやうな氣がした。が、それが私の奇妙な錯覺であることを、やがて私のうちに蘇つて來たその頃の記憶が明瞭にさせた。今はこんなにも雜草が生ひ茂つて殆んど周圍の雜木林と區別がつかない位にまでなつてしまつて居るこの庭も、その頃は、もつと庭らしく小綺麗になつてゐたことを、漸く私は思ひ出したのである。さうしてつい今

しがたの私の奇妙な錯覚は、その時から既に経過してしまつた數年の間、若しそれがそのままに打棄^{うちちり}られてあつたならば、恐らくはこんな具合にもなつてゐるであらうに……といふ私の感じの方が、その當時の記憶が私に蘇るよりも先きに、私に到着したからにちがひなかつた。しかし、私のさういふ性急^{せうかち}な印象が必ずしも贗ではなかつたことを、まるでそれ自身裏書きでもするかやうに、私のまはりには、この庭を一面に掩うて草木が生ひ茂るがままに生ひ茂つてゐるのであつた。

そのこのヴェランダにはじめて立つた私は、錯雜した樅の枝を透して、すぐ自分の眼下に、高原全帯が大きな圓を描きながら、そしてここかしこに赤い屋根だの草屋根だのを散らばらせながら、横はつてゐるのを見下ろすことが出來た。さうしてその高原の盡きるあたりから、又、他のいくつもの丘が私に直面しながら緩やかに起伏してゐた。それらの丘のさらに向ふには、遠くの中央アルプスらしい山脈が青空に幽かに爪でつけたやうな線を引いてゐた。そしてそれが私のきざきざな地平線をなして居るのだつた。

夏毎にこの高原に来てゐた數年前のこと、これと殆んどそっくりな眺望を楽しむために、私は屢しば、ここからもう少し上方にあるお天狗様まで登りに來ただけけれど、その度毎に、この最後の家の前を通り過ぎながら、そこに毎夏のやうにいつも同じ二人の老嬢が住まつてゐるのを何となく氣づかはしげに見やつては、その二人暮らしに私はひそかに心をそそられたものだつた。

——だが、あれはひよつとすると私自身の悲しみを通してばかり見てゐたせゐかも知れないぞ？（と私は考へるのだつた。）何故つて、私がこの丘へ登りに來た時は、いつも私に何か悲しいこ

とがあつて、それを肉體の疲勞と取り換へたいためだつたからな。眞白な名札が立つて、それには MISS のついた苗字が二つ書いてあつたつけ。……さう、その一方が確か MISS SEYMORE といふ名前だつたのを私は今でも覚えてゐる。が、もう一方のは忘れた。さうしてその老嬢たちそのものも、その一方だけは、あの銀色の毛髪をして、何となく子供子供した顔をしてゐた方だけは、今でも私の眼にはつきりと浮んでくるけれど、もう一方のはどうしても思ひ出せない。昔から自分の氣に入つた型の人物にしか關心しようとしなない自分の習癖が、(この頃ではどうもそれが自分の作家としての大きな才能の缺陷のやうに思はれてならないのだけれど) この老嬢たちにも知らず識らずの裡に働いて見たものと見える。

……この數年間といふもの、この高原、この私の少年時の幸福な思ひ出と言へばその殆んど全部が此處に結びつけられてゐるやうな高原から、私を引き離してゐた私の孤獨な病院生活、その間に起つたさまざまな出來事、忘れがたい人々との心にもない別離、その間の私の完全な無爲。……そして、その長い間放擲してゐた私の仕事を再び上げるために、一人きりにはなりたし、さうかと言つてあんまり知らない田舎へなんぞ行つたら淋しくてしやうがあるまいからと言つた、例の私の不決斷な性分から、この土地ならそのすべてのものが私にさまざまな思ひ出を語つてくれるだらうし、そして今時分ならまだ誰にも知つた人には會はないだらうしと思つて、こんな季節はづれの六月の月を選んで、この高原へわざわざ私はやつて來たのであつた。が、數日前にこの土地へ到着してから私の見聞きする、恰かも私のさういふ長い不在を具象するやうな、この高原に於けるさまざまな思ひがけない變化、それにつけても今更のやうに蘇つて來る、この

土地ではじめて知り合ひになつた或る女友達との最近の悲しい別離。……

そんな物思ひに耽りながら、私はほんやり煙草を吹かしたまま、ほとんど私の真正面の丘の上に聳えてゐる、西洋人が「巨人の椅子」といふ綽名をつけてゐるところの大きな岩、それだけがあらゆる風化作用から逃れて昔からそっくりそのままに残つてゐるかに見える、どつしりと落着いた岩を、いつまでも見まもつてゐた。

私はやがて再び枯葉をガサガサと音させながら、山徑を村の方へと下りて行つた。その山徑に沿うて、落葉松などの間にちらほらと見える幾つかのバンガロオも大概はまだ同じやうな紅殻板を釘づけにされたままだつた。ときをり人夫等がその庭の中で草むしりをしてゐた。彼等の中には熊手を動かしてゐた手を休めて私の方を胡散臭さうに見送る者もあつた。私はさういふ氣づまりな視線から逃れるために何度も道もないやうなところへ踏み込んだ。しかしそれは昔私の大好きだつた水車場のほとりを目ざして進んでゐた私の方向をどうにかかうにか誤らせないでゐた。しかし其處まで出ることは出られたが、數年前まで其處に「ごとごと」と音立てながら廻つてゐた古い水車はもう跡方もなくなつてゐた。それよりもつと悲しい氣持になつて私の見出したのは、その水車場近くの落葉松を脊にした一つのヴィラだつた。私の屢しば訪れたところのそのヴィラは、數年前に最後に私の見た時とはすつかり打つて變つてゐた。以前はただ小さな灌木の茂みで無難作に縁どられてゐたその庭園は、今は白い柵できちんと區限られてゐた。私はふと何故だか分らずにその滑らかさうな柵をいちくらくとして手をさし伸べたが、それにはちよつと觸れただけであつた。そのとき私の帽子の上になんだか雨滴のやうなものがぼたりと落ちて來たから。そ